

「チュラロンコーン大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学経済学部三年生 東泰大

①学習成果

出発前は、大学生同士の国際交流について漠然としたイメージしかもっていなかった。現地の学生たちと議論をしたり、発表をしたり、そうした大学生ならではの学問や研究を通して交流が図れたという点で、今回のプロジェクトは私にとって非常に新鮮で、意義の大きなものとなった。人種の違いは勿論、文化や価値観といったものを相対的に捉えることが出来たため、「日本」について再発見があった。また個人的な話では、大学の経済学部で勉強していた限りでは「タイ」という国は発展途上国で生活水準はそれほど高くはないと学んでいた。しかし実地で見たところ富裕層と貧困層の格差が日本以上に大きなものであったのだが、タイにはそれを受け入れる寛容さを持っていた。経済学について、これまでは指標や数値といった定量的な情報からのアプローチのみに着眼していたが、文化や価値観といった定性的な情報も組み入れることも重要だと感じた。国際交流だけでなく、専門分野の経済学につながるような情報・経験を得ることが出来たので非常に実りの多いプログラムとなった。今後も海外留学に意欲的に参加していきたいと、より強くそして明確に目標を持つことが出来た。

②海外での経験

海外に滞在した期間は今回のタイの二週間が今までで最も長いものとなった。食文化や歴史、政治体制の違いといったものについてより深く学ぶことが出来た。特にタイは仏教国であり、その価値観を日常の様々な場面で感じることが出来た。例えば施しを与えるということが、駅や道といった日常生活の中で行われていた。「困ったときはお互い様」という言葉が日本にはあるが、日本より倫理的・宗教的な観点から行われており、その根っこに流れる「自己犠牲」という仏教の精神を体感できた。

③プログラム内容

プログラム内容は、全体としては非常に満足いくものであった。学習内容として、タイ語、タイ文化の歴史、日本語の講義がバランスよく盛り込まれており、二週間という時間を考えるとちょうどいい分量であった。また講義の難易度もちょうどよかった。またアユタヤ見学やバンコク市内見学などの課外活動も、授業で習ったタイ語を実践でき、タイ文化を肌で感じる事が出来たため、とても良かった。提案としては、基本的に私たちだけの授業が多かったので、現地の学生と混じって授業を受けるといったスタイルを増やしてもよかった。またアユタヤ歴史研究センターも良かったが、現地の職員の方によるとアユタヤから出土した物が展示されている施設があるそうで、そっちを見に行くことをお勧めしていた。

④進路への影響

今後の進路については、国際交流を図れる場所で活躍したいという思いを強くした。やはり文化や価値観の多様性に触れながら生活するのは、毎日の発見に大きな差がある。困難も増えるがそれ以上のやりがいや楽しさがある。ただ何と言っても語学の壁があるので、英語に加えてタイ語についても勉強しようと思う。幸い京都大学には多くの留学生がいて環境としては整っているため、それらを活用して今後の可能性を広げられるように勉強していくつもりだ。